

新富座場割は本読の日遽にvari一番目ハ四幕に詰め二番目

を加ることに定り中幕の勸進帳も半四郎の役(義経)が家桶になる

諸新聞でも噂の有外国人から新富座へ送つ

た幕ハ地が紫の絹で松竹梅の丸の中へ差渡

六尺有かたばみの紋が三所色糸の縫でいつ

もの宛名の所へ守田氏と白糸で縫た書ハ市

川万庵先生が書れたので巾が四布程あり升

下に在東京外 国人中と有て実に見覚しい立

派な物其外に横浜の蘭人中から送つた天幕

ハ地が萌黄色の輪な天鵝で真中ハ座元の紋

左右ハ古代模様の内から竺仙さんが見だし

たと云かたばみ艸の様な風流な紋を金糸と

いろ糸で縫出て新富座長守田氏へ在横浜蘭

国人中よりの文字を横に双べて左右へ割て

白糸縫にした眼を驚かす程の物で有升扱引

幕へ添て来た手紙の訳大略は去明治十一年

六月該座再造開業の節在東京外国人を御招

待且御厚遇下され其寸報迄に引幕一張を呈

上するよし右任人のエーゼー、エス、ポールス。ヘンリー、

ホン、シーボルト。トマス、マツクラチ。の三人より書き送り

たり誠に該座の光栄面目ともいふべし